

# 平成 29 年の漁況

向井哲也・佐藤勇介・金元保之

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年（昭和35年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2017年の総漁獲量は約10万1千トンで、前年（2016年、以下同様）比131%、平年（2012年～2016年の5ヶ年平均、以下同様）比115%であった。一方、CPUE（1統1航海当り漁獲量）は65.5トンで、前年・平年を上回った（前年比157%、平年比137%）。2003年以降、長期的にみるとCPUEは増加傾向にある。なお、2017年の漁労体数は11ヶ統（県西部3ヶ統、県東部8ヶ統）であった。

本県のまき網漁業の漁獲の主体は、1970年代後半～1990年代前半のマイワシから、1990年代後半にマアジに変遷し、近年は同種が漁獲を支える構造にあった。ところが、2011年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジとともに漁獲を支える主要魚種となっている。魚種別の動向をみると、マイワシ（総漁獲40%）、マアジ（同22%）、ウルメイワシ（同4%）、カタクチワシ（同4%）は前年を上回り、サバ類（同20%）は前年を下回る漁況であった。

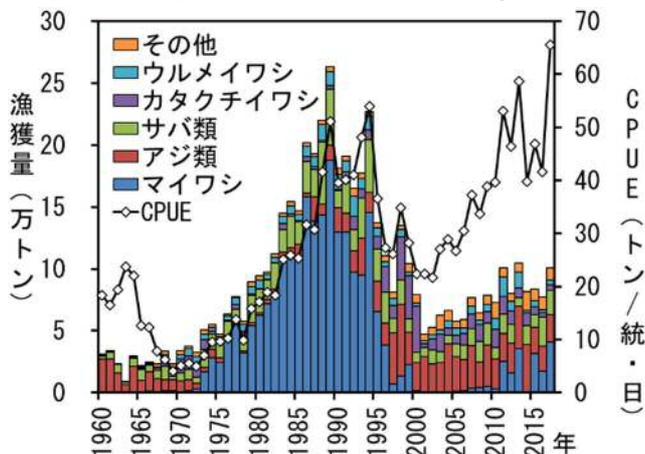


図1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量とCPUEの推移(2002年までは農林水産統計値、2003年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値)

### (2) 魚種別漁獲状況

図2～6に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

#### ① マアジ

2017年の漁獲量は約2万2千トンで、前年並みで平年を下回った（前年比110%、平年比79%）。漁獲の主体は、冬季が2歳魚（2015年生まれ）、春季以降は1歳魚（2016年生まれ）であった。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけてまとまった漁獲があることが多く、3月～7月の漁獲量は約1万9千トンで前年・平年を上回る漁況であった（前年比198%、平年比176%）。特に3月にまとまった漁獲があった。一方、秋季（9月～11月）の漁獲量は約1千4百トンで前年・平年を大きく下回る漁況であった（前年比21%、平年比14%）。

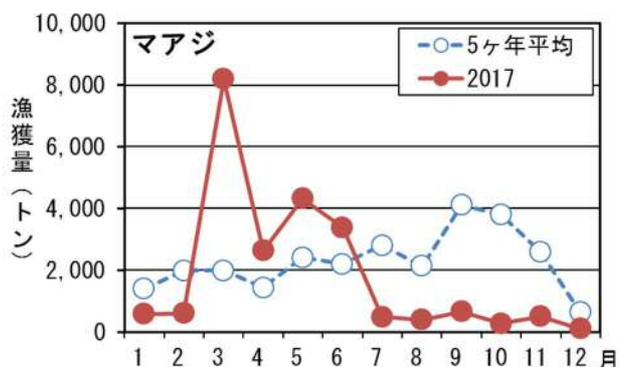


図2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

#### ② サバ類

2017年の漁獲量は約2万トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比84%、平年比137%）。山陰沖ではサバ類の漁獲は例年、秋季～翌春が好調であり、4月～9月にかけては低調となる。本年の冬季（1～3月）の漁獲は約1万3千トンで前年・平年を上回る漁況であった（前年比117%、平年比185%）。また、秋季（10～12月）の漁獲は約8百トンで前年・平年を大きく下回った（前年比10%、平年比18%）。漁獲の主体

は、冬季がマサバ1歳魚（2016年生まれ）、夏季以降はマサバ0歳魚（2017年生まれ）であった。

### ③ マイワシ

2017年のマイワシの漁獲量は約4万トンで、前年・平年を大きく上回った（前年比233%、平年比202%）。月別の漁獲動向をみると、県東部を主漁場として3、6、10月にかけて漁獲がまとまり、10月には7千トンを超える漁獲があった。

山陰沖のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（漁獲量約2万5千トン）から漁獲が急増した。2012年以降も2014年（同850トン）を除き、約1万5千トン～4万トンの漁獲が続いており、マイワシ資源は回復傾向にあると考えられるが、2014年のように漁獲がまとまらない年もあり、今後も動向を注視する必要がある。

### ④ カタクチイワシ

2017年のカタクチイワシの漁獲量は約4千トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比131%、平年比44%）。月別の漁獲動向をみると、前年と同じような漁模様で、漁獲は9～11月に集中し、春季はほぼ皆無であった。近年、カタクチイワシの漁獲盛期は春季（3月～5月）又は秋季（9月～11月）のどちらかになる年が多いが、2017年は秋季のパターンであった。

### ⑤ ウルメイワシ

2017年のウルメイワシの漁獲量は約4千トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比159%、平年比67%）。月別の漁獲動向をみると、3月～6月にまとまった漁獲があり、11月にも散発的な漁獲があった。近年、ウルメイワシの漁獲は秋季に盛期となるが多かったが、2017年は春季と秋季に漁獲が多くなる二峰型の漁獲パターンとなった。

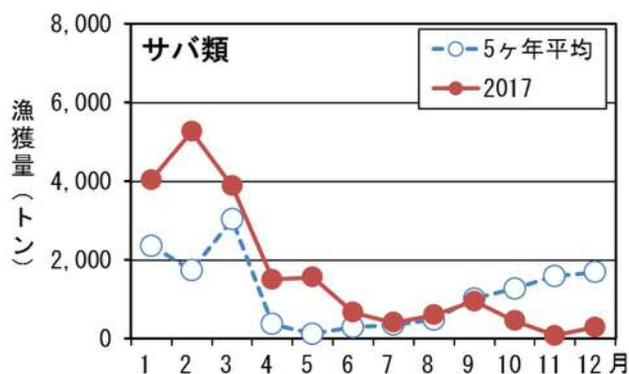


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

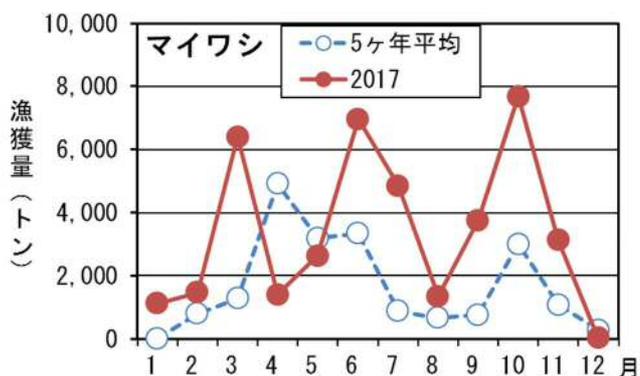


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

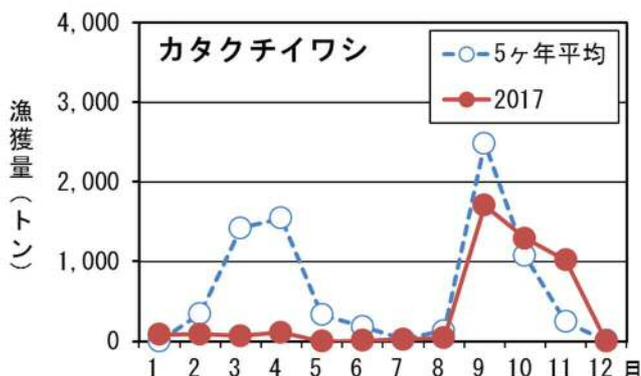


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

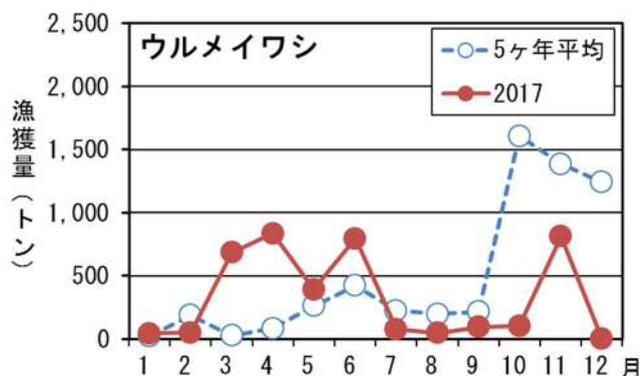


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

## 2. いか釣り漁業

ここでは、県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港（島根県浜田市）に水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向をとりまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業（5トン未満船）、小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣り漁業（30トン以上）である。

### （1）スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2012年以降の水揚げ量および水揚げ金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

2017年の漁獲量は37トンで、前年（472トン）、平年（467トン）を下回った（前年比8%、平年比8%）。水揚げ金額は約2千万円（前年比8%、平年比10%）であった。キログラムあたりの平均単価は467円で、平年（359円）の1.2倍程度であった。

スルメイカの月別の水揚げ動向を図9に示した。島根県沖では、例年、冬季～3月は冬季発生系群の産卵南下群が、3月～初夏は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2017年は漁期を通じて両系群が低調に推移した。近年は両系群の資源状態が不良\*であり、今後も漁獲が低調に推移すると推察される。

※水産庁による平成29年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群の資源水準は「低位」、動向は「減少」、秋季発生系群の資源水準は「中位」、動向は「減少」とされている。

### （2）ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2012年以降の水揚げ量および水揚げ金額、単価の経年変化を図10と図11に示した。

2017年のケンサキイカの漁獲量は193トンで、前年（267トン）・平年（437トン）を下回った（前年比73%、平年比44%）。水揚げ金額は約2億2千万円で、前年比83%、平年比57%であった。キログラムあたりの平

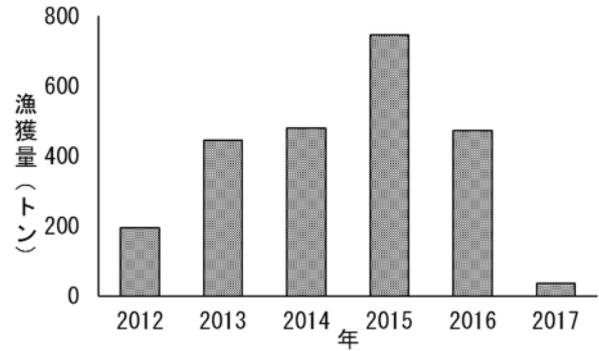


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚げ量の経年変化

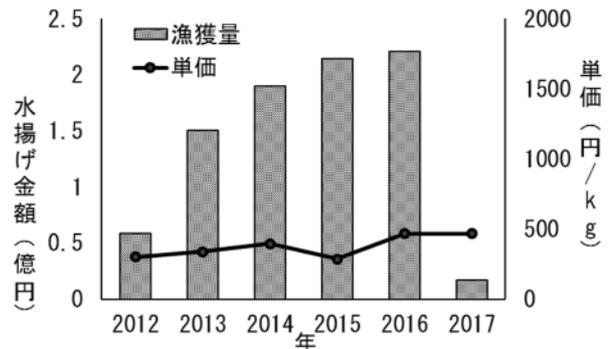


図8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚げ金額と単価の経年変化

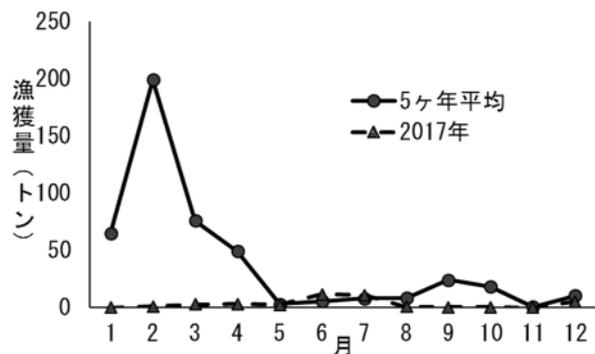


図9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚げ動向

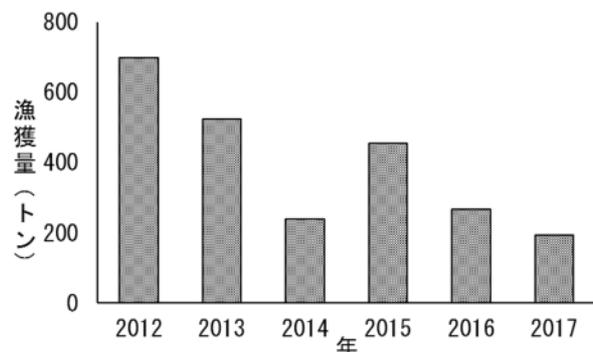


図10 浜田漁港におけるケンサキイカの経年変化

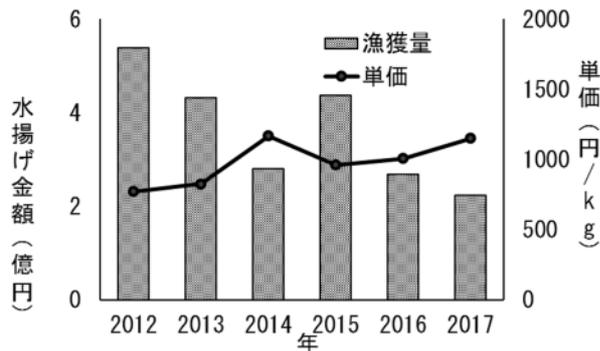


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

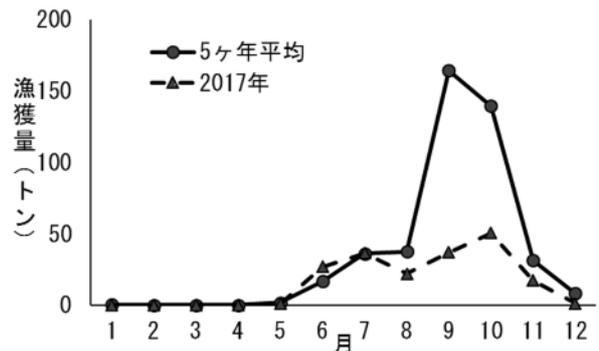


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向

均単価は 1,152 円で、平年（947 円）の 1.2 倍程度であった

ケンサキイカの月別の水揚動向を図 12 に示した。2017 年のケンサキイカ漁は 6 月中旬から水揚量が増え始め、ケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群（5 月～8 月）の漁獲量は平年を下回る 87 トン（平年比 92%）、ブドウイカ型が主体となる秋季来遊群（9 月～12 月）も平年を下回る 106 トン（平年比 31%）であった。2006 年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、秋季来遊群の漁獲量は、2011 年（1,095 トン）をピークに減少傾向にあり、今後の資源動向を注視する必要がある。

### 3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在7統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする5統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした（6月1日～8月15日までは禁漁期間）。

#### （1）全体の漁獲動向（図13）

浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（操業統数5ヶ統）の2017年漁期（2017年8月16日～2018年5月31日）の総漁獲量は3,297トン、総水揚金額は16億4,831万円であった。また、1統当たりの漁獲量は660トン、水揚金額は3億2,966万円で、漁獲量・水揚げ金額ともに平年を上回った（過去10年平均：616トン、2億9,961万円）。

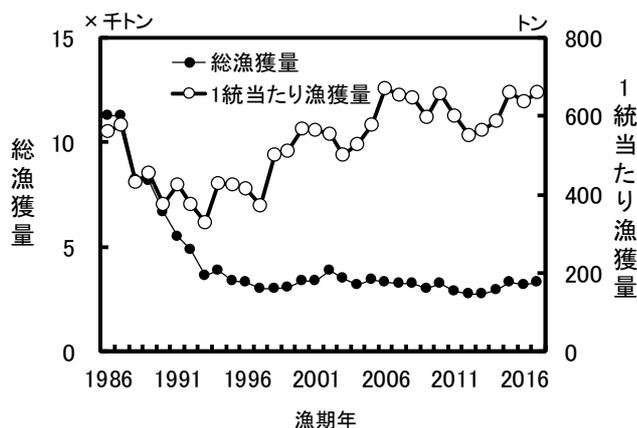


図13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり漁獲量の経年変化

#### （2）主要魚種の漁獲動向（図14）

##### ①カレイ類

ムシガレイのCPUEは51トンで平年の7割、ソウハチのCPUEは44トンで平年並、ヤナギムシガレイのCPUEは15トンで平年の1.1倍の水揚げであった。

##### ②イカ類

ケンサキイカのCPUEは33トンで平年の8割、ヤリイカのCPUEは7トンで平年並の水揚げとなった。

##### ③その他の魚類

アナゴ類のCPUEは42トンで平年の1.1倍、ニギスのCPUEは7トンで平年の4割の

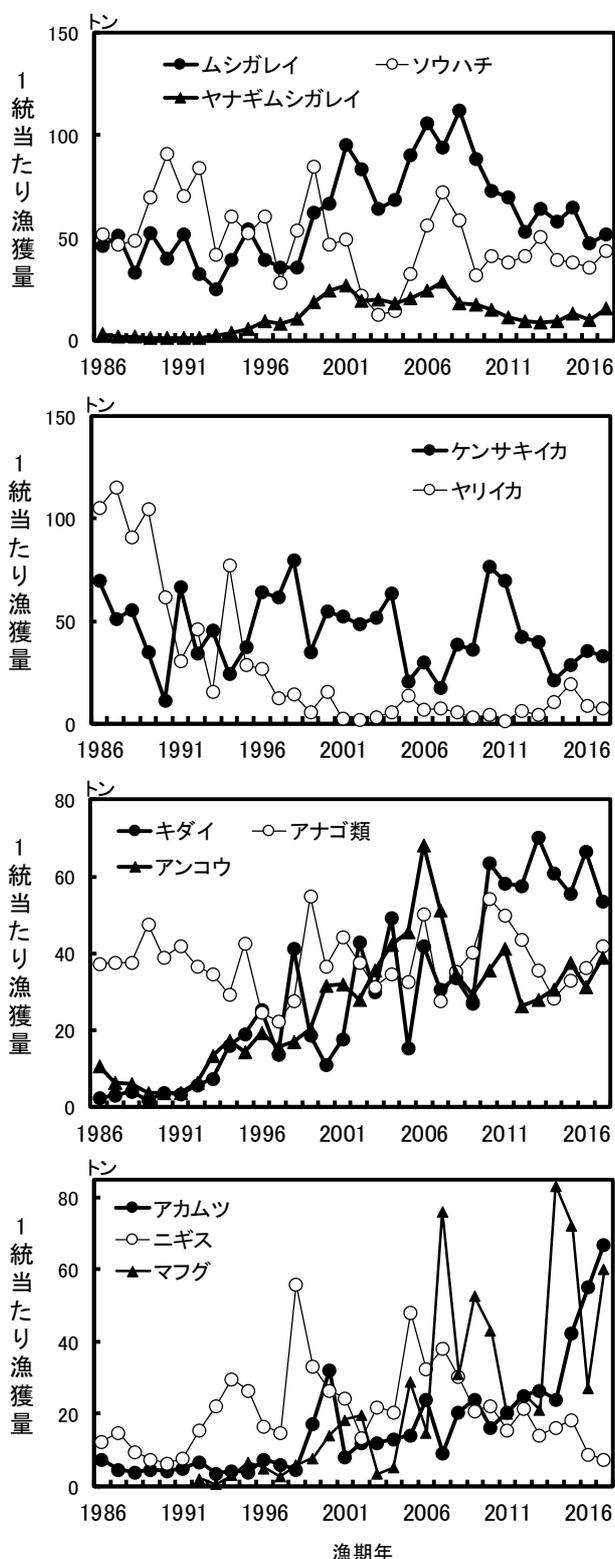


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化

水揚げに留まった。また、アンコウの CPUE は 39 トンで平年の 1.1 倍の水揚げとなった。

アカムツの CPUE は 67 トンで、平年の 2.5 倍の水揚げとなった。

また、マフグの CPUE は 60 トンで、平年の 1.3 倍の水揚げになった。キダイの CPUE は 54 トンで、平年並の水揚げとなった。

この他、カワハギ類の CPUE は 13 トンで平年の 7 割、マトウダイの CPUE は 18 トンで平年の 1.2 倍の水揚げとなった。

#### 4. 小型底びき網漁業第 1 種（かけまわし）

小型底びき網漁業 1 種（以下、小底という）は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深 100～200m の海域を漁場とし、現在 43 隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 9 月 1 日から翌年 5 月 31 日までとした（6 月 1 日～8 月 31 日までは禁漁期間）。なお、1 隻はずわいがに漁業との兼業船で漁期を通して操業を行わないことから、これを除いた 42 隻分の集計とした。

##### (1) 全体の漁獲動向（図 15）

2017 年漁期（平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 5 月 31 日）の総漁獲量は 3,791 トン、総水揚げ金額は 17 億 3,716 万円であった。1 隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は 91.9 トン、水揚げ金額は 4,198 万円で、漁獲量では平年を 11% 下回ったが、水揚げ金額では平年を 4% 上回った

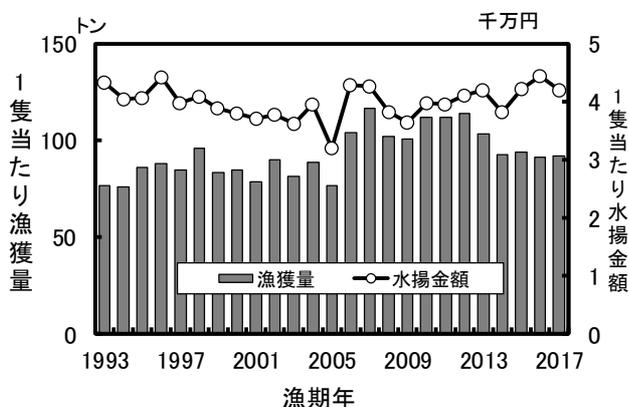


図 15 小型底びき網漁業における 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化

（過去 10 ヶ年平均；103.7 トン、4,040 万円）。

##### (2) 主要魚種の漁獲動向（図 16）

###### ①カレイ類

ソウハチの CPUE は 17.4 トンで、前年の 1.1 倍で平年の 8 割の水揚げとなった。一

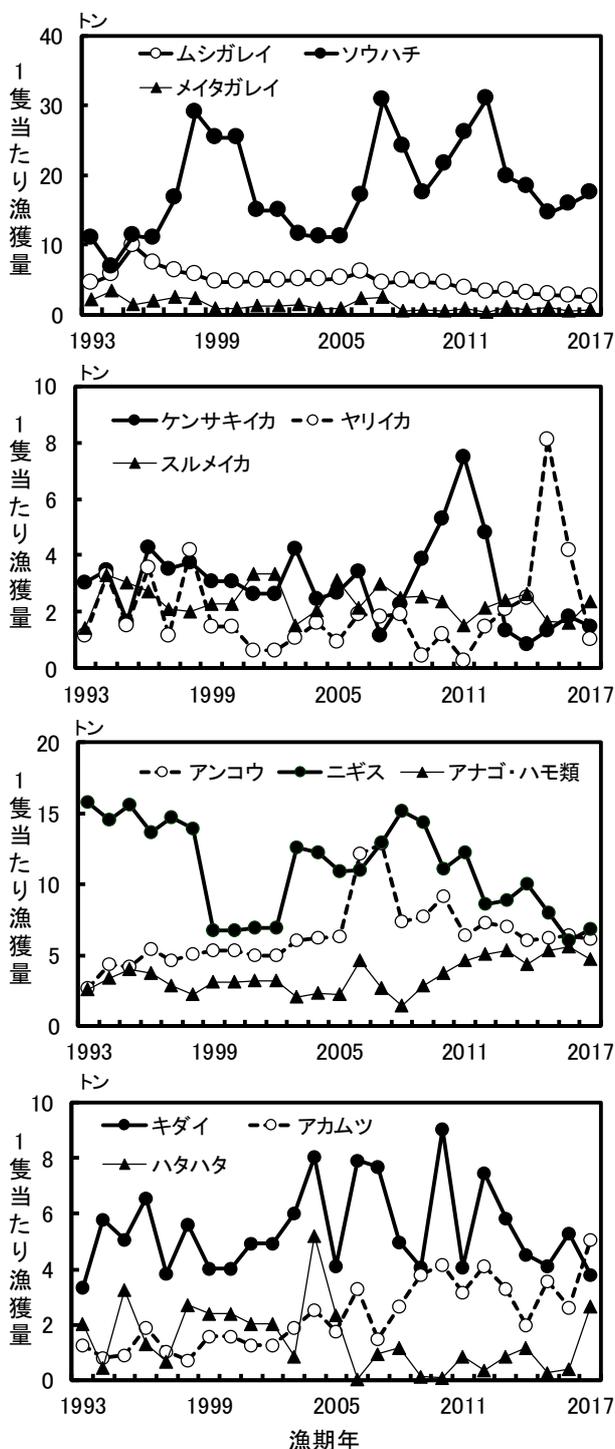


図 16 小型底びき網漁業における主要魚種の 1 隻当たり漁獲量の経年変化

方、ムシガレイの CPUE は 2.5 トンで前年並で平年の 7 割の水揚げに留まった。このほか、ヤナギムシガレイの CPUE は 1.1 トン（平年の 7 割）、アカガレイの CPUE は 6.3 トン（平年の 1.6 倍）、ヒレグロの CPUE は 9.4 トン（平年の 1.2 倍）であった。

### ②イカ類

ケンサキイカの CPUE は 1.5 トンで、前年の 8 割、平年の 5 割の水揚げに留まった。ヤリイカの CPUE は 1.1 トンで前年の 3 割、平年の 4 割であった。

### ③その他の魚類

アカムツの CPUE は 5.1 トンで、前年の 1.9 倍、平年の 1.6 倍となった。キダイの CPUE は 3.8 トンで平年の 7 割となった。ニギスの CPUE は 6.9 トンで平年の 6 割、アンコウの CPUE は 6.2 トンで平年の 8 割の水揚げであった。アナゴ類の CPUE は 4.7 トンで、平年の 1.2 倍の水揚げであった。

## 5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業（第 1 種）休漁中の 6～8 月に、本県沖合の水深 200m 前後で行われ、2017 年は 3 隻が操業を行った。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用ならびにエッチュウバイの価格動向について検討を行った。また、資源生態調査として、大田市の久手漁港および仁摩漁港に水揚げされた漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、銘柄別漁獲量から本種の殻高組成を推定した。

### (1) 漁獲動向

2017 年のばいかご漁業における総漁獲量・総水揚金額は 61.1 トン・3,208 万円、1 隻当たりの漁獲量は 20.4 トン・1,069 万円であった。1 隻あたり漁獲量・金額は近年増加傾向にあったが、2017 年は航海日数減少のため前年を下回った。

図 17 にエッチュウバイの 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の推移を示す。2017 年の 1 隻当たりの漁獲量・金額は 16.6 トン・899 万円であった。2017 年の平年比は漁獲量が 101%、水揚金額が 123%であった。

漁獲されたエッチュウバイの殻高組成については、2017 年はこれまでに比べ殻高 50～60mm の小型貝が多い組成となった。

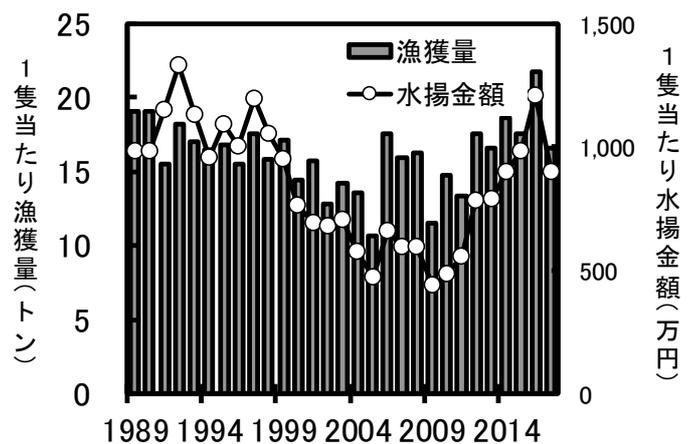


図 17 ばいかご漁業におけるエッチュウバイの 1 隻当たり漁獲量と水揚金額の推移